

- で叱る。
- ⑦子育て上の課題や問題点の答えは、ほとんど自分自身の中にあるので、すぐに原因や責任を他者に求めず、まず自分自身を問う。
- ⑧先回りの指示は、子どものやる気と主体性を奪つので、我が子を信頼して、任せるべきことは任せる。特に、「朝、自分で起きること」は、自立の第一歩と肝に銘ずる。
- ⑨子育てのパートナーである教師・保育士・厚生員との「信頼に基づいた連携」を図る。
- ⑩衣食住や安全、安定、愛情、承認、集団所属など、我が子の「人間としての基本的な欲求」の充足のために、明日への活力を生む家庭を築く。
- ⑪物が豊かで、情報化された現代は、子育ての難しい時代と受け止める。
- ⑫テレビやパソコン、携帯電話、ゲーム、ビデオなどの「電子映像メディア」への接触時間を、一日2時間以内にコントロールする。
- ⑬学力偏重を避け、「知・徳・体」調和のとれた子育てを実践する。
- ⑭「親としての自分」が、日々、誠実に生きる。

本年度、蓼科高校入学式の学校長式辞で、金原正校長先生が、次のような



「保護者の方へのお願い」をされました。

「これから始まる高校生活3年間。お子さんから元氣や喜びをもらうことも沢山ありましょうし、反面、幾多の試練に直面し、共に悩むことも必ずあると思います。そうした中でお子さんにとって大切なことは、家庭生活における安定したいつも変わらぬご家族の支えだと思えます。健康管理を第一に、家庭学習を定着させること、夜更かしや遅刻をさせないこと、服装を整えること、朝食をとることなど、日常の生活をしっかりと支えていただきたくお願い申し上げます。」

金原校長先生からのメッセージは、前述の「十四の提言」と共通し、「立科教育」の推進基盤である「家庭教育」の役

割を端的に示していますので、ぜひ参考にされ、「当事者」として、地道に実践していただきたいと存じます。

物事には、必ず原点があります。分厚い「壁」にぶつかって、どんなに頑張っても効果的な解決策が見出せないとき、古来、それぞれの原点に戻る知恵が伝承されています。原点に立ち戻りますと、絶望的な「壁」の中に思わぬ活路を見出すことがあるからです。

では、「立科教育」の原点とは何でしょうか。

老生は、次の二点が「立科教育」の原点ではないか、と考えています。

平成24年6月の第2回定例議会一般質問で、小宮山和幸町長が、「立科教育」の成果と特色について、「長い目で見るのが大切。結果として、他と違う特色あるものになればと思っています。」と答弁されました。この見解こそ、「立科教育」推進の原点ではないでしょうか。

成果を決して急がない、そして、特色とは、誠実に、粘り強く、地道に実践し続けた結果に対する他者からの評価である、という見識を原点として、「立科教育」を推進されているリーダーの皆様には、「立科っ子」の健やかな成長と自立のために、あせることなく、ゆったりとのびやかに「立科教育」を導かれますことを、心よりご期待申し上げます。

小宮山町長の見識を「立科教育」推進上の原点とするならば、「立科教育」の精神的な原点は、立科町が生んだ偉大な教育者、五無齋・保科百助先生でありたい、と願っています。

保科百助先生は、反差別を貫く教師であり、「地球をおっ欠いて商にする職人」(五無齋と信州教育)平沢信康著)と自称する石の狩人(鮎物標本採集家)であり、また、巧みな狂歌師であり、「五無齋の如き人物は二人あるべからず」(詩伝・保科五無齋 三石勝五郎著)と評されています。

時代が異なり、「教員がどつしりと構え、悠然たる態度で、児童をして澁刺たる活動をなさしめよ、という児童の自発活動を重んずる指導法」(保科五無齋)井出孫六著)を提唱した保科百助先生の理論と実践を、すべて取り入れることはできません。しかし、明治34年3月、33歳にして蓼科小学校・保科百助校長が提出した辞表に認められた退職事由の内にたぎる「無垢なる教育的情熱」(井出孫六)、すなわち、教師としての主体性や意欲、反骨心、責任感、誠意、良心、謙虚さこそは、「立科教育」の原点となすべき精神ではないでしょうか。

辞表には、「人の子を賊いたる事少なからず甚だ恐縮の至りにつき」と記されていたのです。